

# ハイドンのオラトリオ「四季」の分析と考察

平岡 一幸<sup>\*1</sup>

## Analysis and discussion of Haydn's Oratorio "The Seasons"

Kazuyuki Hiraoka<sup>\*1</sup>

In this article, we focus on Franz Joseph Haydn's oratorio "The Seasons" ("Die Jahreszeiten" in German). After summarizing the life of Haydn and his era, this musical piece is analyzed and discussed while contemplating the four seasons in Austria and the sceneries of the Danube River valley and the forests of Vienna as the background of the musical piece. Furthermore, "The Seasons" is interpreted as a sequel to the oratorio "The Creation" referring to Mozart's musical pieces.

### 1. はじめに

この小文ではフランツ・ヨーゼフ・ハイドン（以下、ハイドン）が作曲したオラトリオ「四季」（ドイツ語では“*Die Jahreszeiten*”、英語では“*The Seasons*”）に焦点を当てる。「ハイドンとその時代」について触れた後、ドナウ川の渓谷やウィーンの森などを背景としたオーストリアの四季に思いをめぐらせながら楽曲を分析し解説する。さらにオラトリオ「天地創造」の続編としてのオラトリオ「四季」という観点から物語を読み解くとともにモーツァルトの楽曲にも触れながら考察する。

### 2. ハイドンとその時代：ハイドンが「オラトリ

#### オ四季」を書くに至るまで<sup>1-12)</sup>

作曲者のハイドンは、1732年3月31日、「ドイツ国民の神聖ローマ帝国（以下、神聖ローマ帝国）」の領邦であったオーストリア大公国に生まれた<sup>1-7)</sup>。首都ウィーンから東南東に50キロほど離れたハンガリーとの国境に近い（現在はスロバキア共和国との国境にも近い）のニーダーエスタライヒ地方（下オーストリア地方もしくは低地オーストリア地方と訳される。以下、低地オーストリア地方と記す）のローラウ村（Rohrau）が出生地である<sup>1-9)</sup>。

ローラウ村で過ごした幼年時代のことを伝記作家のカール・ガイリンガー（Karl Geiringer）は、「夕方、仕事が終わると父と母は炉端に座り、父が自慢のハーブを伴奏に家族皆で好きな民謡を歌うのが常であった。幼いゼッパールも（Sepperl：ヨーゼフのオーストリア風の愛称、幼いハイドンのこと）歌の輪に加わり美しい声で皆を魅了した（拙訳）」と記している<sup>4)</sup>。「四季」の冬の章（第33曲<sup>⑤</sup>）で3人のソリストが語り歌う村人たちの団らんの場面を彷彿とさせる<sup>10-12)</sup>。

少年期のハイドンは音楽教育を受けるためローラウ村から近いハインブルクの街（Hainburg an der Donau）にある叔父の家で過ごし、そののちウィーンの聖ステファン大聖堂の少年聖歌隊に入る<sup>1-7)</sup>。変声のため聖歌隊を去ったのちは、生計を得るため「流し」などもやっていたようだが、その才能を見出されボヘミア（現在のチェコ共和国）のルカヴィツェ（Lukavice: プラハから東に150キロ）に住むモルツィン伯爵家の楽長になる<sup>1-7)</sup>。その後、ウィーン近郊のアイゼンシュタット（Eisenstadt: ウィーンから南南東へ約40キロ）を居城とするハンガリーの大貴族であるエステルハージ侯爵家の宮廷副楽長に就任し（ハンガリーの貴族制度は廃止されたがエステルハージ家は今も続いている）、程なく宮廷楽長となる。音楽を愛するエステルハージ家のニコラウス侯は、領地の狩場であったノイジードル湖畔にベルサイユ宮殿を模した夏の離宮・エステルハーザ宮殿を築き、そこにオペラ劇場やマリオンネット劇場などを造らせた<sup>1-9)</sup>。ハイドンの作品の多くは約30年間勤めたエステルハージ家の時代に作曲されたものである。

1790年にニコラウス侯が亡くなり宮廷楽団が縮小されたのを機にハイドンはウィーンへと移る。宮仕えから解放された彼は1791年1月から1792年7月にかけての1年半と1794年2月から1795年8月にかけての1年半をロンドンで過ごすなど交友や音楽活動の幅を広げる<sup>1-7, 13)</sup>。ロンドンではロンドン・セットと呼ばれる交響曲群（交響曲93番から104番）を作曲したことで知られているが、当時のウィーンではあまり演奏されていなかったヘンデルのオラトリオに接したことも大きい。特に、それまで小規模な宮廷楽団で演奏してきたハイドンにとって、2000人規模で演奏されたヘンデルのオラトリオ「メサイヤ」は大きな刺激だったようである<sup>1-3, 14)</sup>。ウィーンに戻ったハイドンは、これまで弦楽四重奏曲や交響曲さらには歌劇（オペラやジグシュピール）などで培ってきた音楽手法を駆使し、自身の集大成として二つのオラトリオを書き上げる<sup>1-</sup>

<sup>\*1</sup> 東京工芸大学 工学部 工学科 教授  
2024年7月23日 受理

3, 14, 15)。ひとつは神話や英雄の世界を描くオペラ・セリア（正歌劇）を下敷きにしたオラトリオ「天地創造、”Die Schöpfung“、ホーボーケン番号（以下、Hob.）XXI:2, 1798年4月29日ウィーンにて初演」、以下「天地創造」<sup>16, 17)</sup>、そしてもうひとつは「魔笛」などに代表されるジングシュピールやオペラ・ブッフア（喜歌劇）を想わせる世俗的なオラトリオ「四季、”Die Jahreszeiten“、Hob. XXI:3, 1801年4月24日ウィーンにて初演」、以下「四季」、である<sup>10-12, 17)</sup>。「四季」の創作活動で消耗したハイドンは、その初演からほどなくして公けの音楽活動の場から引退し(1803年12月の「十字架上のイエスの七つの言〈オラトリオ版〉」が公けの指揮の最後)、そして1809年5月にナポレオン軍がウィーンに侵攻するなか5月31日に77歳でこの世を去った<sup>19)</sup>。占領下のウィーンのショッテン教会（die Schottenkirche）において、6月15日に追悼会（eine Trauerfeier）が行われた。そこでは最愛の友であったモーツァルトのレクイエムが歌われた<sup>1, 3-7)</sup>。

余談だが、ハイドンはドイツの国歌を作曲したことで知られている<sup>1, 3, 8, 9)</sup>。18世紀の終わり、ナポレオン率いるフランス革命軍の脅威にさらされた神聖ローマ帝国では将兵を鼓舞するために国歌「神よ、皇帝フランツを守りたまえ」が作られた（1797年）。作曲を依頼されたのは当時人気があったハイドンである。神聖ローマ帝国解体後もオーストリア帝国の国歌として歌い継がれるが、その後、共和制となったオーストリアでは顧みられなかった。しかし、同じく神聖ローマ帝国から派生した帝政ドイツが崩壊した後のワイマル共和国（ドイツ共和国）では、このハイドンの旋律が採用され「Deutschland über alles in der Welt!（世界に冠たるドイツたれ!）」が国歌となる。ナチス・ドイツでも歌われたこの歌は、大戦後の厳しい議論や東西ドイツの統一を経て、今日のドイツ連邦共和国の国歌として3番の歌詞「Einigkeit und Recht und Freiheit（統一と正義と自由）」が歌われている<sup>18)</sup>。

### 3. 楽曲の構成<sup>1-3, 10-12, 14-24)</sup>

オラトリオ「四季」は「春」・「夏」・「秋」・「冬」の四部で構成され、第一部の「春」が8曲、第二部の「夏」が10曲、第三部の「秋」が10曲、第四部の「冬」が11曲の全39曲からなる（Eulenburg社の研究用総譜<sup>10)</sup>ならびにBreitkopf & Härtel社の総譜<sup>11)</sup>に準拠）。

台本は「天地創造」を手掛けたファン・スヴィーテン男爵ゴットフリート（Gottfried van Swieten 男爵, 1733～1803）によるものである。スコットランドの詩人ジェイムズ・トムソン（James Thomson, 1700～1748）の叙事詩「The Seasons」<sup>19)</sup>のバルトルト・ハインリヒ・ブロッケス（Barthold Heinrich Brockes, 1680～1747）によるドイツ語訳（1745）<sup>20)</sup>をもとにして、ハイドンが幼少期に過ごした低地オーストリア地方の農村を舞台としたドイツ語の台本が作られた<sup>1-3, 14)</sup>。ドナウ川が流れるこの地方はオーストリアワインの生産地として知られており、また貴族たちが狩猟を楽しんだウ

ィーンの森の一角でもある。

前作のオラトリオ「天地創造」では旧約聖書の「創世記」やミルトンの「失樂園」に基づき<sup>21, 22)</sup>、ガブリエル（ソプラノ）、ウリエル（テノール）、ラファエル（バス）の3人の天使が天地創造の物語を歌い上げ、神の似姿として造られたアダムとエバ（イヴ）が愛と創造主への讃美を歌った<sup>1-3, 14)</sup>。続編となるオラトリオ「四季」では楽園を追放された人間たちの世界が描かれている。小作人の農夫・ジーモン（バス）、ジーモンの娘・ハンネ（ソプラノ）、若い農夫・ルーカス（テノール）の3人が主人公となり、時に歌手として、時に語り手としてオーストリアの四季を描く。登場人物名をルカ（ルーカス）福音書第2章の「赤子のイエスを救い主として抱き上げるシメオン（ジーモン）とイエスを皆に伝えるアンナ（ハンネ）」になぞることで、新約聖書の三位一体の神と、このオラトリオを繋いでいる<sup>21)</sup>。

「春の訪れ」、「夏の嵐」、「恋の話」、「森を駆け抜ける狩り」、「収穫の宴」、「炉端の団らん」、「天国への門」などを題材とした楽曲を通して、幸せに過ごすためには「勤勉」でなければならず、いずれ天国の門を通り帰天するためには「徳」を積むことが欠かせないと歌い上げる（詩篇 15:1-5, 24:3 など）<sup>1-3, 14, 21, 23, 24)</sup>。ハイドンの時代には衣装を着けた上演もあったと伝えられるオラトリオ「四季」は、ハイドンが到達したオペラ・ブッフアの一つの形とも考えられる<sup>1-3, 14)</sup>。

本稿ではオラトリオのあらすじを概観できるように、物語全体を以下のように(1)～(17)の場面に分け、小見出しをつけるとともに関連する楽曲をまとめた。尚、これらの17の区分は筆者によるもので楽譜にはない。

#### 第一部「春：Der Frühling」[第1曲-第8曲]

- (1) プロローグ：天から地へ、冬から春へ [第1曲]
- (2) 春を願う村人たち [第2曲-第4曲]
- (3) 豊作への祈り [第5曲-第7曲]
- (4) 春の讃歌 [第8曲]

#### 第二部「夏：Der Sommer」[第9曲-第18曲]

- (5) 夏の夜明け [第9曲-第10曲]
- (6) 太陽の恵みと厳しさ [第11曲-第13曲]
- (7) 夏の森の昼下がり [第14曲-第15曲]
- (8) 夏の嵐、大驟雨 [第16曲-第17曲]
- (9) 家路につく村人たちの夕景 [第18曲]

#### 第三部「秋」[第19曲-第28曲]

- (10) 豊作の喜びと勤労への感謝 [第19曲-第20曲]
- (11) 愛の二重唱 [第21曲-第22曲]
- (12) 森を駆け抜ける狩り；「鳥撃ち」，「兎狩り」，そして「鹿狩り」 [第23曲-第26曲]
- (13) 収穫の宴\_\_葡萄酒万歳 [第27曲-第28曲]

#### 第四部「冬」[第29曲-第39曲]

- (14) 冬の到来\_吹雪の中をさまよう旅人  
[第29曲-第32曲]  
(15) 炉端の団らん\_糸紡ぎの歌 [第33曲-第34曲]  
(16) 冬の夜の楽しみ\_ハンネの語り聞かせ  
[第35曲-第36曲]  
(17) エピローグ：天国への門 [第37曲-第39曲]

#### 4. 楽曲の分析と考察<sup>1-3, 10-12, 14-24)</sup>

「春」、「夏」、「秋」、「冬」の各部は季節を象徴する序曲で始まり、それをソリストたちによるレチタチーフが受けて物語が進行する。その後、「語りの要素が多いレチタチーフ（以下、叙唱）」、「伴奏付きレチタチーフ（以下、レチタチーフ）」、「アリア（旋律的独唱）」や「カバティーナ（簡素なアリア）」、「重唱」、「合唱」などにより物語が展開されるが、時に「Spinnerlied（糸紡ぎの歌）」や「貴族を風刺したコミックオペラ」などが挿入される。本稿では随所に現れる「描写的・写実的な音楽手法」についても注目しながら順を追って楽曲を解説するとともに、オラトリオ「天地創造」やモーツァルトの楽曲にも触れながら考察する。尚、楽曲を解説・考察する際に記す曲番号や小節番号は文献10に示したEulenburg社の研究用総譜に準拠し、併せて文献11に示したBreitkopf & Härtel社の総譜も参考にした。また、Peter社の合唱譜の曲番号も①のように丸で囲んだ数字で併記した<sup>12)</sup>。尚、本文中の「T.」は小節（Takt）を表し、例えば「T.10」は第10小節の意味である。

##### 4.1 第一部「春：Der Frühling」[第1曲-第8曲①-⑨]

###### (1) プロローグ：天から地へ、冬から春へ[第1曲①]

楽園を追放された人々の世界を描く「四季」の序曲は、暗く重々しいト短調のLargoから始まる[第1曲①]。すぐに激しいVivaceとなり地上の荒々しい冬の嵐を奏でるなか、アダムとエバの子孫であり地上の春・夏・秋・冬を生きる3人の農民たちが登場する。

嵐の序曲を背景に年長のジーモン（バス）が「見よ、厳しい冬が荒ぶる嵐とともに極北へ遠ざかるのを...；Seht, wie der strenge Winter flieht! ...」と歌い出し[第1曲 193小節から（以下、T.193~と表記）]、若い農夫ルーカス（テノール）が雪どけの急流を描く弦楽奏を伴い「見よ、岸壁からの雪が解け濁流となって流れるのを；Seht, wie vom schroffen Fels der Schnee ...」と続いた後[T.223~]、長閑な春を思わせるオーボエに導かれて若い娘ハンネ（ソプラノ）が南から春の使者が来たことを「見て、南の風に誘われて春の使者がやってきたわ！；Seht, wie von Süden her, ...」[T.236~]と告げてオラトリオ「四季」の幕が上がる[第1曲、序曲とレチタチーフ、4/4拍子（以下、[ ]内では「拍子」を省略）]。

###### (2) 春を願う村人たち [第2曲-第4曲②-④]

第2曲は春を待ち焦がれる村人たちの合唱である。晴朗

な6/8拍子ト長調の旋律に乗って、全員で「春よ来い！天の恵みである春よ来い！...；Komm, holder Lenz! Des Himmels Gabe, ...」と歌い始め[第2曲 T.1~]、女声合唱が「うららかな春が近づいています、...；Er nahet sich, der holde Lenz. ...」と続く[第2曲 T.44~]。一転、序曲に似た冬の嵐を思わせる管弦楽奏を伴った男声合唱が「早まってはしゃぎ過ぎるな！寒さが舞い戻り花や芽を悴（かじか）ませることもある；Frohlocket ja nicht allzu früh. ...」と歌い継ぎ[第2曲 T.62~]、最後は村人全員で「天の恵みの春よ、早く我らの田畑に降りたっておくれ！；... Auf unsre Fluren senke dich! O komm, holder Lenz, und ...」と締め括る[第2曲 T.80~]

年長の農夫ジーモンが「太陽が牡羊座に回り...寒気は緩み...母なる大地は清々しい空気で満ちている」と春の到来を告げる[第3曲、叙唱]。続くアリアでは早春の青い空を思わせるハ長調にて、Allegrettoの軽快な2/4拍子に乗って魔笛ならぬ口笛を吹きながら早春の畑に種を蒔く様子を歌う[第4曲]。このアリアの伴奏にはロンドン・セット交響曲群の中でモーツァルトが没した1791年に作曲された「交響曲第94番（Mit dem Paukenschlag〈ティンパニの一撃と伴に〉）」の第2楽章の旋律が使われている<sup>26)</sup>。「Mit dem Paukenschlag」の言葉の通り、このオラトリオでは、「夏の嵐での落雷や遠雷（第17曲）」、「秋の狩猟での鉄砲の音（第24曲）」、「収穫の宴の舞曲風フィナーレ（第28曲）」、などの重要な箇所でもティンパニ（die Pauke）が活躍する。

###### (3) 豊作への祈り [第5曲-第7曲⑤-⑦]

種を蒔き終えた若い農夫ルーカスは自然からの豊かな収穫を天に願い[第5曲、叙唱]、引き継いだ第6曲「三重唱と合唱」では村人が皆で恵の雨を天に乞う。まずルーカスが「穏やかな天よ、慈悲をもって我らの土地に祝福を滴らせ給え！；Sei nun gnädig, milder Himmel! ...」と穏やかな3/4拍子のハ長調で歌い始め、やがて「その時こそ豊穰の芽が吹き、あなたの慈悲には感謝と讃美の音が芽吹く；Uns sprießet Überfluß alsdann, und deiner Güte Dank und Ruhm.」を主題としたフーガとなり、村人たち全員で天へ祈る（第6曲 T.74~、un poco più moto）。このフーガはモーツァルトのレクイエム中のOffertrium/Hostiasの55小節からのフーガ「Quam olim Abrahæ promisisti, et semini ejus.；かつてあなたがアブラハムとその子孫に約束されましたように（創世記15章15節）」のオマージュとなっており、そのラテン語の歌詞からわかるように「天地創造」と「四季」との楔の役目を果たしている（遺作となったこのレクイエムはモーツァルトの死後に補筆され1793年に初演されている）<sup>25)</sup>。第4曲で使った交響曲第94番とともに、かつて滞英中に接した若き畏友の訃報（1791年12月5日没）に思いをはせたのであろう。ハイドンの口述を記したアルベルト・クリストフ・ディース（Albert C. Dies）が著した伝記によれば、ハイドンが渡英する際に彼の高齢を心配したモーツァルトは、「われわれはおそらくこの世では、最後のさよならを



ということになるでしょう（文献6のp.92から引用）」と泣いて渡英を止めたとある<sup>9)</sup>。また、この選曲は第四部「冬」のクライマックスにおける「魔笛」に通じる場面設定への布石とも思われる（あとがきを参照のこと）。

フーガの後、ハンネは「我らの祈りは聞き届けられました。西風が暖かさを運び<sup>27)</sup>、(中略)、美しさと豊かさを与えています；*Erhört ist unser Flehen. Der laue West erwärmt und ...*」と語り、皆の願った春の訪れを告げる〔第7曲、レチタチーフ〕。

#### (4) 春の讃歌〔第8曲 ⑧-⑨〕

そして「春」の部の終曲は「喜びの歌“Freudenlied”」（第8曲）である。前半は花が咲き誇る春の野のピクニック〔第8曲 ⑧ T.1~176, *Andante*, イ長調〕。語り歩くような穏やかな2/4拍子で「なんと美しい春の野の景色でしょう！...；*O, wie lieblich ist der Anblick der Gefilde jetzt! ...*」とオーストリアの美しい春の情景をハンネが歌い出し、やがてルーカスとの二重唱となる。そして若者たち（混声合唱）が加わりスキップするような軽やかな旋律で冒頭の言葉「*O, wie lieblich ist ...*」を合唱する。

娘たち（女声合唱）が「すてき、胸がときめくわ！；*Welche Freude, welche Wonne, schwellet unser Herz!*」と歌い、若者たち（テノールの合唱パートソロ）が「甘い魅力と欲求に胸の気持ちが抑えられない；*Süße Triebe, sanfte Reize heben uns're Brust.*」と応えると、年長のジーモンが「お前たちが感じ、魅了しているものは創造主の息吹きなのだ；*Was ihr fühlet, was euch reizet, ist des Schöpfers Hauch.*」と諭し、娘たちと若者たち（混声合唱）は「創造主を敬い、讃え、讃美しよう！鳴り響かせたまえ、私たちの主への感謝を声高らかに！；*Laßt uns ehren, laßt uns loben, laßt uns preisen ihn!*...」と創造主を讃美する。

第8曲の後半は神への讃歌である〔第8曲 T.177~, ⑨〕。

「永遠にして、全能の、寛大なる神よ！；*Ewiger, mächtiger, gütiger Gott!*」と堂々とした*Maestoso*の合唱から始まり〔変ロ長調 4/4〕、途中、ソリストたちが*Poco Adagio*の優美な3/4拍子で「祝福を分かち与えてくださる饗宴で、あなたは我々を元気づけてくださった；*Von deinem Segenmahle hast du gelabet uns.*」と神への感謝を歌った後〔T.189~〕、再び合唱とソリスト3人が冒頭の歌詞「*Ewiger, mächtiger, gütiger Gott!*」を*f*（フォルテ）で歌い神を讃える。214小節からは「荣誉が、賛辞が、賞賛が、永遠にして寛大な神！全能の神にありますように！；*Ehre, Lob und Preis sei dir, ewiger, gütiger Gott! Mächtiger, gütiger Gott!*」を主題とする*Allegro*の大フーガとなり神を讃え、最後は力強いコーダで「春」の部が結ばれる。

## 4.2 第二部「夏：Der Sommer」〔第9曲-第18曲 ⑩-⑱〕

### (5) 夏の夜明け〔第9曲-第10曲 ⑩-⑪〕

第二部の「夏」は、描写音楽を多用してオーストリアの農村の真夏の日を描いている。序奏の出だしは暗闇と霧

が支配する漆黒の夜を思わせる低音の弦楽奏である。夜明け前の森の鳥たちの声（クラリネットとファゴットのソロ）に導かれて、ルーカスが「あけぼの空に空が染まる。もはや死の鳥フクロウの低く不吉な鳴き声に怯えることもない；*In grauem Schleier rückt heran das sanfte Morgenlicht....*」と、フクロウの鳴き声を描写する6連符の弦楽奏（例えば、20小節）を伴いながら語り始める〔第9曲 ⑩ T.1~27, レチタチーフ, ハ短調 4/4〕。

鶏の鳴き声（オーボエのソロ、例えば29小節）が聞こえ、「朝を告げる鶏の音が農夫を起こし新たな一日が始まる；*Des Tages Herold meldet sich....*」とジーモンが語りを引き継ぎ〔第9曲 T.28~38, ハ長調 4/4〕、ホルンの響きに導かれたハ長調6/8拍子の軽快な*Allegretto*のアリアで「陽気な羊飼いが暗いうちから羊を集め、丘へ追い上げ、東を眺めて暁の初光を待つ；*Der muntere Hirt versammelt nun die frohen Herden ...*」と歌う〔第10曲 ⑪ T.1~66〕。66小節からはハンネのレチタチーフへと移り「朝焼けで空が染まり、紺色の空に山の頂きが黄金の炎に輝く；*Die Morgenröte bricht hervor....*」と、山頂の日の出の光景を描く〔第10曲 T.66~79, ハ長調 3/4〕

### (6) 太陽の恵みと厳しさ〔第11曲-第13曲 ⑫-⑭〕

第11曲はニ長調（*Deus*の調）で歌われる「太陽の讃歌」である。ソリストたちの三重唱が「太陽が昇り、近づき、光を放ち、輝く！；*Sie steigt herauf, die Sonne ....*」と、太陽の昇っていく様子をゆっくりとした半音階の上昇音型で歌い始め、やがて合唱も加わる〔第11曲 ⑫ T.1~8, *Largo*, 4/4〕。9小節からは*Allegro f*（フォルテ）となり、「荘厳な炎に包まれた太陽は壮麗に光輝く。光と命の源、万歳！」と太陽を讃美する〔第11曲 T.9~57〕。途中、3/4拍子*Andante*の三重唱となり「生命と恵みを授けてくれた創造主」への感謝を歌った後〔T.58~70〕、再び合唱により「太陽万歳...；*Heil, o Sonne! Heil! ...*」と、太陽への讃歌を高らかに歌い上げる〔第11曲 T.70~117, 二長調 4/4〕。

第12曲と第13曲は夏の太陽がもたらす収穫と日照りにより疲弊する自然を描く。第12曲前半は強い日差しのもとで穀物を収穫する農夫たちの様子がジーモンにより「日焼けした刈り手たちの前にたわわに実った穀物が...；*Dem braunen Schnitter ...*」と語られる〔第12曲 ⑬ T.1~10, 叙唱〕。

第12曲後半では「灼熱の太陽が降り注ぎ、灼けた地表にはかげろふがゆらめく...；*Die Mittagssonne brennet jetzt ...*」と、厳しい日照りの光景をルーカスがレチタチーフで歌う〔第12曲 T.11~23〕。続く第13曲のカバティーナでは、「花はしおれ、草は枯れ、灼熱の猛威に人も獣（けもの）もやつれ果て大地にうち伏している；... *welke Blumen, dürre Wiesen, trock'ne Quellen, ...*」と、気だるくゆっくりとしたホ長調で生き物たちの様子を描く〔第13曲 ⑭, *Largo*, ホ長調 4/4〕。

### (7) 夏の森の昼下がり〔第14曲-第15曲 ⑮-⑯〕

一方、日差しが遮られた森の中は心地良い。ハンネがその様子を「老木が木陰を作り、ポプラの葉が小川のせせらぎとともにさらさらと涼しげな音を立てています。陽の暖かさで孵化した虫たちが楽し気に飛び交い、西からのそよ風が心地よい草の香りを運び、草むらの陰からは羊飼いの吹く笛の響きが聴こえてきます」と、ハ長調 3/4 拍子のレチタチーフで歌う [第 14 曲, Poco Adagio]。波下線部の歌詞には描写音楽が施されており、例えば「木々のざわめき (T.1~26, 管弦楽奏)」、「小川のせせらぎ (T.29~35, 16 分音符の 6 連符の弦楽奏)」、「虫の羽音 (T.37~42, 32 分音符が続く弦楽奏)」、「立ち昇る草の芳香 (T.51~52, 第一ヴァイオリンの上昇音型)」などが相当する。最後に羊飼いの角笛(オーボエのソロ)が次のアリア[第 15 曲, 変ロ長調]を導く。

第15曲はハンネのアリアである。前半の3/4拍子のAdagioは、終始、羊飼いの角笛(対旋律)が恋人のようにソプラノに寄り添って進行し、「なんてみずみずしい感じでしょう！爽やかな血がすみずみまでいきわたり、すがすがしくなります；*Labung für die Sinne! ...*」と、清楚な逢瀬を上品に奏でる。後半は若者の甘美な時間を描いたAllegro assaiの4/4拍子となる。オーボエの他にフルートなども加わり「魂は目覚めて歓喜し、甘い衝動が若者の胸をときめかします；*Die Seele wachet auf ...*」と歌う。そして次の第16曲からは恋人たちの逢瀬を見送るように夏の驟雨(夕立)が襲う。

#### (8) 夏の嵐、大驟雨 [第 16 曲-第 17 曲 ⑰-⑱]

ソリスト3人のレチタチーフが驟雨の近づく様子を伝える [第16曲 ⑰]。ジーモンが「おお、見よ！雲が天を真っ黒な闇で覆いつくす」と告げ、ティンパニが遠雷を奏でる中、ルーカスが「聞け、谷間からのにぶい轟きが嵐を告げている！」と続く [第16曲 ⑰ T.1~20, 4/4]。雷の音(ティンパニ)が近づき大粒の雨(弦楽奏のピチカート)がポツポツと降り始めるなか、不安に脅えた生き物たちは息をひそめ、静寂があたりを支配する [T.20~34, ハンネのレチタチーフ, 3/4]。

Allegro assai (非常に速く)のフルートが稲妻を描き、*ff assai*の落雷のティンパニの一撃で「嵐の合唱」が始まる [第17曲 ⑱, ハ短調 4/4]。管弦楽はAllegro assaiのまま雷を伴った嵐を描写し、突然の恐怖のために逃げ惑う農民たちは(合唱)「*Hilft uns, Himmel! Wo fliehen wir hin! ... (天よ助け給え！どこに逃れよう！...)*」と叫ぶ [T.1~71]。72小節からはAllegroのフーガとなり、2/2拍子の行進曲風に暴風雨でどよめく大地を表すとともに、雷鳴(フルート)を伴った嵐が迫り来て、その後、次第に過ぎ去り遠ざかる様子を描く [T.75~168, Allegro, 2/2]。

#### (9) 家路につく村人たちの夕景 [第 18 曲 ⑲]

夕立が去った後、村人たちは家路につく。ソリスト3人により「(ルーカス) 暗い雲は切れ、嵐の怒りは静まった。

(ハンネ) 沈む夕日で田園は真珠の輝きを帯びる。(ジーモン) 満腹となった牛たちは牛舎へと帰る」と、夕暮れの田園風景が描かれる [第 18 曲 ⑲ T.1~, Allegretto, ハ長調 2/4]。歌詞に出てくる「帰ってくる牛たち (T.27~30, 管弦楽奏)」、「鶉(うずら) (T.38~39, オーボエ)」、「コオロギ (T.42~44, フルード)」、「蛙たち (T.46~49, フルード・オーボエ・クラリネットなど)」の鳴き声は描写音楽で表現されている。

ホルンが奏でる夕べの鐘に導かれて「鳴り響く夕べの鐘... ; *Die Abendglocke tönt ...*」と三重唱で歌う [T.53~]。65小節からAllegro 3/4拍子の変ホ長調となった三重唱に導かれて、合唱が一日の仕事を終えて楽しげに家路につく農民たちの姿を「一番星のきらめきが私たちを憩いへと誘う；... *von oben winkt der helle Stern...*」と歌い終え、第二部「夏」を締めくくる [T.83~]

### 4.3 第三部「秋」[第 19 曲-第 28 曲 ⑳-㉓]

#### (10) 豊作の喜びと勤労への感謝 [第19曲-第20曲 ㉑-㉒]

第三部の「秋」はアダムとエバの子孫が築く地上の楽園が描かれている。ここでも随所に描写的な音楽手法が使われる。豊作の喜びをテーマとする序奏のメヌエットは、穏やかな秋の日を思わせる明るいト長調のAllegrettoで始まる [第19曲 ㉑, T.1~46]。途中、これまでの苦労を思わせる短調の部分を変えた後、47小節から3人が語り始める [T.47~64, 叙唱, ハ長調 4/4]。ハンネが「春が花を咲かして約束し、夏が暑さで熟成させたものを、今、秋が実らせ農夫を喜ばせる；*Was durch seine Blüte der Lenz zuerst versprach, ...*」と語り、それを受けてルーカスが「農夫はその豊かな実りを、収穫で高く積み上げられた車の上にさらに積み込む。畑が実を付けたものは、広い穀物倉でもほとんど入れる余地がないほどだ；*Den reichen Vorrat führt er nun auf hochbelad'nen Wagen ein. ...*」 [第19曲 T.54~64, ㉑]と続く。さらにジーモンが「高く積み上げられた神の恵みを見まわして、農夫は収穫の喜びを味わう；*Sein heiteres Auge blickt umher; ...*」と、農夫たちの農作業と収穫の喜びを歌う。

第20曲は「勤労への讃歌(三重唱と合唱)」である。弦楽奏の軽快なAllegrettoのリズムに乗ってファゴット、オーボエ、フルートの各木管楽器がソロで前奏を奏でた後、ジーモンが「自然は勤労に報いてくれた... ; *So lohnt die Natur den Fleiß. ...*」と歌い出す [第20曲 ㉒, T.1~31, ハ長調 4/4]。ハンネとルーカスの二重唱が「おお、勤労。すべての幸福はおまえから生まれる；*O Fleiß, o edler Fleiß! Von dir kommt alles Heil. ...*」と続き、97小節から合唱も加わる。そして126小節からは「*O Fleiß! o edler Fleiß! ...*」を主題としたPiù Allegroのフーガとなり勤勉な労働への讃歌を華やかに歌う [第20曲, T.126~216, ハ長調 4/4]。

#### (11) 愛の二重唱 [第21曲-第22曲 ㉓-㉔]

第21曲はオーストリアの美しい果樹園の収穫風景 [第21

曲 ㉓, 叙唱] が描かれる。「子供たちは木をゆすってヘーゼルナッツを収穫し ... ; Seht, wie zum Haselbusche ...」 [第21曲 T.1~8]、「若者は木に登り恋人の気を引こうとくるみの実を投げている ; Hier klimmt der junge Bauer ...」 [T.8~17] とハンネとジーモンが語り、ルーカスが「果樹の周りで収穫している娘たちの頬は摘み取っている果実の様にみずみずしい ; Im Garten stehen um jeden Baum die Mädchen groß und klein, dem Obste, das sie klaben, an frischer Farbe gleich.」と、村の娘たちを自慢する [T.17~22]

町から来た紳士・淑女たちに素朴で美しい村娘を自慢する中、ルーカスが「あれが私の恋人のハンネです。彼女が愛を誓うときその瞳は微笑み、その唇は心の内を語ります」と恋人を語り [第22曲 ㉔ T.1~77, Allegretto, 変ロ長調 2/4]、ハンネは「私たちの心を動かすのは正直な真心だけ。私の望みはルーカスの誠実な心です」と応えて「愛の二重唱」が始まる [T.79~146]。

二人は「(ルーカス) 木の葉は落ち、果実がしぼみ、月日が経とうとも僕の愛は変わらない」 [T.152~166]、「(ハンネ) あなたが私への愛を言葉にするたび...日々はますます光り輝きます」 [T.170~201] と愛の言葉を交わす。202 小節からハ長調 3/4 拍子の Adagio となり、二人揃って「忠実な愛はなんという幸せ。私たちの心はひとつとなり、死ぬまで切り離せない」と声を合わせ。232 小節からは第 24 曲冒頭の変ロ長調に戻り、2/4 拍子の Allegro で「Lieben, und geliebet werden ... (愛し、愛されることこそ、...)」と歌う。前作「天地創造」の「アダムとエバによる愛の二重唱 [第 3 部第 29 曲]」に勝るとも劣らないこの歌の美しさは、楽園を追放された人々も変わらず恋をし、愛を育て地上の楽園を築いていることを表現している。

(12) 森を駆け抜ける狩り ; 「鳥撃ち」, 「兎狩り」, そして「鹿狩り」 [第23曲-第26曲 ㉕-㉘]

収穫を終えた晩秋の畑に餌を求めて野鳥が押し寄せ中、小作人のジーモンは領主のお楽しみである狩りの準備に忙しい様子 [第23曲 ㉕, ジーモンの叙唱]。そして程なく「鳥撃ちのアリア」が始まる [第24曲 ㉖]。

ジーモンが「見ろ、犬たちが草むらを歩き回るのを。地面に足跡を探しもとめ、絶え間なく追っている」とイ短調の Allegro で歌い始め、スタカートを伴ったファゴットや弦楽奏が犬の歩く様子を伝える [第24曲 T.1~29]。29小節と39小節の2回の Più moto で「犬が走り出し、命令を聞かず駆けだす姿」をリアルに歌い、「獲物を前にしてじっと動かなくなる様子」を *p* (ピアノ) で演奏されるオーボエとフルートが表現する [T.48~52]。イ長調となった53小節では鳥が飛び逃げ、その様子をヴァイオリンとフルートの16部音符の速い動きで奏でる。そして61小節では銃声の音に“Paukenschlag (ティンパニの一撃)”が用いられ、鳥が撃ち捕らえられるのを写実的に描く。

次の第25曲は「兎狩り」である [第25曲 ㉗, レチタチーフ, Allegro, 4/4]。「巢を囲んだ勢子たちが野兎を追立てる ; Hier treibt ein dichter Kreis die Hasen aus dem Lager auf.]

とルーカスが語り始めるが、台詞の間に Allegro の弦楽奏が挟み込まれ、野兎がすばしこく逃げる様子がアニメ音楽、例えば「トムとジェリー」、の様にコミカルに描かれている。曲が進むにつれ Allegro の間奏は短く弱くなり (逃げる兎の数が減っている)、最後は「捕まった野兎たちは一列に地面に並べられ、嬉しそうに数え上げられる ; ... und liegen bald in Reihen freudig hingeählt. ...」と、兎狩りの成果を誇る。

続く第26曲は村を挙げての鹿狩りの光景を描く [第26曲 ㉘, 合唱, Vivace, T.1~83: 二長調, T.84~: 変ホ長調, 6/8]。前曲でルーカスが兎狩りの成功を告げると、すぐさま鹿狩りの始まりを告げる角笛 (ホルン) が響き渡り、狩人が馬を駆り多くの猟犬を使った勇壮な鹿狩りが繰り広げられる。鹿の逃げる様子は軽快で切迫感のあるヴァイオリンを中心とした弦楽奏で描かれ (例えば、T.43~50 など多数)、猟犬の吠える声がファゴットとヴィオラで表現されるなど (例えば、T.34~35 や T.40~42 など多数)、随所に描写的な音楽手法が用いられ生き生きと描かれている。

#### (13) 収穫の宴\_\_葡萄酒万歳 [第27曲-第28曲 ㉙-㉚]

ソリストたちが「葡萄の木には黄金色の房が輝き ... ; Am Rebenstocke blinket jetzt die helle Traub' in vollem Saft, ...」と葡萄畑を歌い、「笑いながらの無駄ばなしが仕事を促し、ぶくぶくと発酵する葡萄汁が陽気な気持ちを喜びの歓声に高めて行く ; Die Arbeit fördert lachender Scherz vom Morgen bis zum Abend hin, ...」と葡萄酒造りを伝えた後は収穫の宴である [第27曲 ㉙]。

管弦楽が鳴り響き「さあ、さあ、葡萄酒だ ! ... ; Juchhe! Juchhe! der Wein ist da, ...」と、今にも踊り出しそうな4/4拍子で村人たちが歌い出し、豊作を祝う陽気な宴が始まる [第28曲 ㉚, T.1~82, Allegro molt, ハ長調]。宴が進んだ83小節からは Allegro assai となり速度が増し、2拍子と3拍子の複合拍子の6/8拍子となる。パパゲーノのアリア (モーツァルトの「魔笛」第1幕第2部 Nr.2 Aria) でも出てくる陽気なかけ声“Heisasa Hopsasa”と伴に<sup>28)</sup>、チャールダーシュ [Csárdás (ハンガリー語もしくはマジヤール語)] などハンガリーの舞曲に代表される2拍子を感じながら、速い3拍子のリズムに乗って村人たちがドイツ舞曲<sup>17, 29)</sup>を踊り始める [第28曲 T.83~, Allegro assai, ハ長調 6/8]。さらにお酒が入った192小節からは鳴り物入りとなり (タンバリン、トライアングル、ティンパニがオーケストラに加わる)、千鳥足となった歓喜は最高潮に達して「秋」の部が明るいハ長調で締めくくられる。ハイドン自身はこの結末のフーガを「泥酔のフーガ」と呼んでいたらしい (文献6のp. 215)。ちなみにトムソンの原詩「The seasons」の「秋」の部では“wine”という言葉は1回しか現れない<sup>19)</sup>。

#### 4.4 第四部「冬」 [第29曲-第39曲 ㉛-㉜]

(14) 冬の到来\_\_吹雪の中をさまよう旅人 [第29曲-第32曲 ㉛-㉜]

明るいハ長調で締めくくった「秋」から一転し、「冬」



は陰鬱なハ短調から始まる〔第29曲 ㉓ T.1~, *Adagio ma non troppo*, ハ短調 4/4〕。冬を告げる垂れ込めた濃い霧を描写する序奏に続いて、冬の風景を描くジーモンとハンネのレチタチーフが続く。「冷たい霧が降り、色あせた一年が沈みゆく、... 真昼でも太陽の光は力ない；*Nun senket sich das blasse Jahr und ...*」とジーモンが語り〔第29曲 T.32~〕、ハンネが「極北のラップランドの洞窟から、荒々しい陰鬱な冬がやって来る...；*Aus Lapplands Höhlen schreitet her ...*」と引き継ぐ〔第29曲 T.56~〕。さらにハンネのカバティーナが「光と命が弱まり鬱々とした昼と暗黒の夜が長く続く；*Licht und Leben sind geschwächt ...*」と、冬の暗い日々を朗々とへ長調 2/4拍子で歌う〔第30曲 ㉔, *Largo*〕。

第31曲と第32曲は、厳冬をさまよい歩く旅人の様子をテノールが歌う。第31曲㉕のレチタチーフでは「広い湖は凍り付き、大地の姿はまるで墓場のようだ。哀しい死の色が支配している...；*Gefesselt steht der breite See, ...*」と荒涼とした冬の風景が、続くアリアでは荒れ狂う吹雪（管弦楽のスタカートが印象的）にさらされる旅人の様子がホ短調の *Prest* で歌われる〔第32曲 ㉖, 4/4〕。第32曲の冒頭は *f*（フォルテ）で元気よく始まるが、徐々に力が無くなり53小節の「今や気力も萎え不安が胸を締め付ける；*Jetzt sinket ihm der Mut, und Angst beklemmt sein Herz.*」に至ると死を予感させる。しかし直後の83小節において、突然、旅人の目に田舎家の灯火が飛び込んでくる。*f*（フォルテ）で歌われる“*plötzlich*”（突然に）は、不安から驚きと嬉しさに変わる旅人の姿が表現されている。94小節からは速度を落としホ長調の *Allegro* となり「旅人は再び生気を取り戻し小屋に向かって進み走る。そこは凍えて疲れ果てた体を癒してくれよう；*Da lebt er wieder auf, vor Freude pocht sein Herz. ...*」と、喜んで田舎家へ急ぐ姿が描かれる。

(15) 炉端の団らん\_\_糸紡ぎの歌〔第33曲-第34曲 ㉗-㉘〕

吹雪く中、旅人（テノール）が田舎家に近づくと中からは団らんの声が聞こえる〔第33曲 ㉗, T.1~5, ルーカスの語り〕。暖かい部屋では村人たちが車座となり、手を動かしながらおしゃべりを楽しんでいる様子〔T.7~11, ハンネの語り〕。炉端では父親たちが若い頃の話に花を咲かせ、母親たちは糸巻き棒で糸を紡ぎ、娘たちは糸車を回す。娘たちの素朴な歌が皆を活気づけている〔T.13~, ジーモンの語り〕。ジーモンの台詞の最後で6/8拍子となり、台詞の合間に糸車の動きを伝える16分音符で上下する弦楽奏の旋律が奏でられる。

第34曲は女たちの糸紡ぎの歌である〔第34曲 ㉘, 合唱付き *Lied*, *Allegro* ニ短調 6/8〕。歌詞はゴットフリート・アウグスト・ビュルガー（*Gottfried Augst Bürger*）による詩「*Spinnerlied*（糸紡ぎの歌）」から採られている<sup>14, 30</sup>。

<sup>31)</sup> 民謡調のシンプルな曲であり、「*Knurre, schnurre, knurre! Schnurre, Rädchen, schnurre! ...*；からから、しゅる

しゅる、からから！ まわれ、まわれ、糸車！ つむいでおくれ糸車、細く繊細な糸を、教会のお祭りにかぶる私の胸を覆うヴェールの糸を！）」と、循環的なモチーフを繰り返すことで、くるくると回る糸車を描写している。この手法はシューベルトの「糸を紡ぐグレートヘン；*Gretchen am Spinnrade, D. 118*」やワーグナーの「紡ぎ歌（さまよえるオランダ人）；*Chor der Spinnerinnen*（*Wagner's Der fliegende Holländer WWV 63*）」などに受け継がれてゆく。

(16) 冬の楽しみ\_\_ハンネの語り聞かせ〔第35曲-第36曲 ㉙-㉚〕

糸紡ぎを終えた女たちはハンネが始める新たな物語を聞こうと周りを囲み、男たちもその外側に集まってくる〔第35曲 ㉙, ルーカスのレチタチーフ〕。ハンネが語り聞かせる「領主の若様の間抜けさを馬鹿にするお話」は合唱の合いの手とともにコミカルに進行する〔第36曲 ㉚, ハンネの *Lied* と合いの手の合唱, *Moderato* ト長調 4/4〕。フランスのファヴァール・シャルル・シモン（*Charles Simon Favart*）のコミックオペラ「*Annette et Lubin*（1762）」を基にして、ヨハン・アダム・ヒラー（*Johann Adam Hiller*）が「田舎の愛；*Die Liebe auf dem Lande*（1768）」を作曲する際にクリスチャン・フェーリクス・ヴァイセ（*Christian Felix Weiße*）が独訳した詩が使われている<sup>14, 30, 32</sup>。フランス革命（1789年~1795年）が起きたこの時代、貴族の間抜けさを馬鹿にする物語は「*フィガロの結婚*；*Le nozze di Figaro*（1786）K. 492」などにも見られる<sup>33)</sup>。

(17) エピローグ：天国への門〔第37曲-第39曲 ㉛-㉝〕

「東から氷の風が突き抜ける。冬将軍の勝利は成し遂げられた...」と厳冬のオーストリアの風景が描かれた後〔第37曲 ㉛, ジーモンの叙唱〕、ジーモンのアリアが始まる〔第38曲 ㉜, 変ホ長調〕。「春は咲き終わり、夏も尽きた、秋は枯れて老いさらばえ、いまや蒼白の冬がおまへの墓を...」と、4/4拍子の *Largo* で人生を振り返る。14小節から秋の記述では、畏友モーツァルトの交響曲40番第2楽章26小節と同じ下降音型を使って枯れ葉が落ち散っていく様が描かれている<sup>34)</sup>〔第38曲 T.1~28, *Largo* 変ホ長調 4/4〕。

29小節からは *Allegro molt* の2/4拍子となり「気高き理想、希求した幸せ、追い求めた栄光...これらは夢のごとく消え美德だけが残った」と若き日を思い起こす。101小節の「*wie ein Traum*（夢のごとく）」に続く夢をいざなう和音進行は、のちにメンデルスゾーンが「〈序曲〉真夏の夜の夢」の冒頭で使っている<sup>35)</sup>。そして112小節からは「一人とどまった美德は、年月が移ろうとも変わらず、我らを至高の目標へと導く」と、ハイドン自らの思いをジーモンに託して独白させている。

そして第39曲、締めくくりの最終曲は神を讃えるハ長調で歌われる〔第39曲 ㉝, 三重唱と二群の合唱〕。トランペ

ットを中心とした管楽器とティンパニによる晴れやかに前奏に導かれ、3人のソリストと二群編成の合唱からなる第39曲が始まる。冒頭、ジーモンが「大いなる朝が始まる」と歌いだし、季節が一巡し再び春が訪れたことを告げる。そして「天国への御門が開かれ、主が坐す宮居のある聖なる山が現れる」とジーモンとルーカスが歌い継ぐ。

続いて、

「〈合唱I〉この門を通ることを許されるのは誰か」、

「〈三重唱〉悪しきを避け、善を成した者」、

「〈合唱II〉この山に登ることを許されるのは誰か」、

「〈三重唱〉その唇から真実を語った者」、

「〈合唱I〉この宮居に住むことを許されるのは誰か」、

「〈三重唱〉貧しい人や困っている人を助けた者」、

「〈合唱II〉そこで安らぎを得られるのは誰か」、

「〈三重唱〉汚れない人に守護と正義を与えた者」、

と詩篇第15篇に基づく歌詞を、ハンネ、ルーカス、ジーモンの3人と合唱I・合唱IIが応唱する<sup>21)</sup>。

その後、二群の合唱が交互に徳を讃え、76小節からは合唱Iと合唱IIが一体となり「おお神よ、その手で我らを導きたまえ！我らに力と勇気を授けたまえ！；Uns leite deine Hand, o Gott! Verleih uns Stärk' und Mut!」を主題とする壮大なフーガとなる。最後は「栄光に輝くあなた国へ入ってきます。アーメン」と永遠の信仰を誓いオラトリオ「四季」の幕が下りる。

## 5. あとがきと謝辞

クライマックスでやり取りされる「この門を通ることを許されるのは誰か?」「悪しきを避け、善を成した者」との応唱は、モーツァルトの「魔笛」第一幕におけるタミーノと神官との問答を思い起こさせます。モーツァルトはその直前で「おんなとおとこ、おとことおんな、愛には神が宿る」と歌わせ、最終場で「愛のために試練を乗り越えたもの」に神殿へ入ることを許しました<sup>28,36)</sup>。一方のハイドンは「徳」をもたらす勤労や勤勉を称え、「天国の門を通るには『徳』を持たねばならぬ」と、正しく生活したものが天国の門を通り永遠の命を得られると説きます。きっと、ハイドンは亡きモーツァルトと音楽上で対話しながら、時には老骨に鞭を打ちモーツァルトの才能と闘いながら、「四季」を作曲したのでしょう。

この小文を書くきっかけを与えていただきました松村努先生(湘南フィルハーモニー合唱団音楽監督/フェリス女学院大学講師)に心から感謝申し上げます。同合唱団の濱口秀一郎様には貴重なご助言を賜りありがとうございます。ありがとうございました。

本小文を書くにあたり、参考文献1に挙げた大宮真琴先生が著された「ハイドン 新版(大音楽家/人と作品2)、音楽之友社(1981)」と、参考文献3に挙げた池上健一郎先生が著された「ハイドン(作曲家・人と作品シリーズ)、音楽之友社(2023)」を参考にさせていただきました、ありがとうございます。中野博詞先生が著された参考文献2

の「ハイドン復活」ならびに参考文献14「ハイドン(作曲家別名曲解説ライブラリ—29)、pp. 350-371、音楽之友社(1993)」、はこの小文を著すのに必須でした、心から感謝申し上げます。また、本文中の歌詞の拙訳は参考文献23、24を参考にさせていただきました。心から御礼申し上げます。

著者は数理科学的な側面から楽理研究も行っていますが<sup>37,38)</sup>、音楽学については浅学で言葉の使い方もままなりません<sup>39,40)</sup>。御専門の先生方にはお目汚しと存じますが、お読みになっていただいた方がいれば厳しいご批判を賜れば幸いです。

本研究は「2023年度コニカミノルタ科学技術振興財団研究奨励金」の助成を受けた研究テーマ「色聴による音-色変換に基づく音楽作品の解析」の一環として行ったものです。研究助成に感謝します。

## 参考文献

- 1) 大宮真琴, ハイドン 新版(大音楽家/人と作品2), 音楽之友社(1981).
- 2) 中野博詞, ハイドン復活, 春秋社(1995).
- 3) 池上健一郎, ハイドン(作曲家・人と作品シリーズ), 音楽之友社(2023).
- 4) K. Geiringer, *Haydn A creative life in music*, University of California Press, Berkeley(1982).
- 5) G. A. Griesinger, *Biographische Notizen über Joseph Haydn*, Breitkopf und Härtel, Leipzig(1810).
- 6) アルベルト・クリストフ・ディース著/武川寛海訳, ハイドン=伝記的報告, 音楽之友社(1978).
- 7) Ludwig Nohl 著/英訳 Georg P. Upton, *Life of Haydn*, Alfa Edition(2023/2/14).
- 8) 増谷英樹, 増補改訂版 図説オーストリアの歴史, 河出書房新社(2023).
- 9) 山之内克子, 物語オーストリアの歴史, 中央公論新社(2019).
- 10) Joseph Haydn, *Die Jahreszeiten Oratorium für 3 Solostimmen, Chor und Orchester (Hob.XXI:3)*, Study Score (Ernst Eulenburg No. 987), London, Ernst Eulenburg Ltd.
- 11) Joseph Haydn, *Die Jahreszeiten Oratorium für Soli, Chor und Orchester (Hob.XXI:3)*, Germany, Breitkopf & Härtel (Nr. 4382).
- 12) Joseph Haydn, *Die Jahreszeiten Oratorium für Solostimmen, Chor und Orchester (Hob.XXI:3)*, Klavierauszug (Edition Peters Nr. 11031), Frankfurt/M, C. F. Peters.
- 13) スタンダール著/大岡昇平訳, ハイドン, 創元社(1941).
- 14) 中野博詞, ハイドン(作曲家別名曲解説ライブラリ—29), pp. 350-371, 音楽之友社(1993).
- 15) 松村努監修, 必ず役に立つ合唱の本 教会音楽編, YAMAHA(2015).
- 16) Joseph Haydn, *Die Schöpfung Oratorium für Solostimmen, Chor und Orchester (Hob.XXI:2)*, Klavierauszug (Edition Peters Nr. 8998), Frankfurt/M, C. F. Peters.
- 17) 新音楽辞典 楽語, 音楽之友社(1977).



- 18) *Tatsachen über Deutschland* (邦版「ドイツの現状」), p. 19 (ドイツ連邦共和国在日大使館のホームページよりダウンロードできます) .
- 19) James Thomson, *The Seasons. In four Books. With Britanina*, Creative Media Partners on behalf of Gale Research. Inc.
- 20) Morton Collins Stewart, *Barthold Heinrich Brockes' Rendering of Thomson's Seasons and the Later German Translations. Part I. The Translation of the Seasons by B. H. Brockes*, *The Journal of English and Germanic Philology*, Vol. 10, No. 1, 20-41 & No. 3, 378-414 (1911). Published by University of Illinois Press.
- 21) 聖書, 日本聖書協会 (1983). ならびに同, 聖書協会共同訳 (1996).
- 22) ジョン・ミルトン著/平井正穂訳, *失楽園*(上・下巻), 岩波文庫, 岩波書店 (1981).
- 23) 大宮真琴, 「ジョン・エリオットガディナー指揮『四季』, POCA-2573/4, ARCHI 社 (1992)」の CD のライナーノートにおける歌詞の邦訳.
- 24) (財) 日本フィルハーモニー交響楽団様による歌詞対訳 : [https://nagoyashimin.sakura.ne.jp/members/gijutu/2010data/taiyaku\\_HP.pdf](https://nagoyashimin.sakura.ne.jp/members/gijutu/2010data/taiyaku_HP.pdf)
- 25) Franz Joseph Haydn, *Sinfonie Nr.94 G-dur Hob.I/94 "Paukenschlag"/Ed.Newstone: Studienpartitur*, (Ernst Eulenburg No. 435), London, Ernst Eulenburg Ltd.
- 26) W. A. Mozart, *Requiem, KV 626 (Completed by F. X Süßmayr)*, Studienpartitur, Kassel, Bärenreiter-Verlag, Bärenreiter TP152 (1965).
- 27) 日本では東風(こち)が春を告げるが, 欧州の春風は西風である. 例えば, "フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』の「アネモイ#西風ゼピュロス」の項を参照.
- 28) Wolfgang Amadeus Mozart, *Die Zauberflöte, KV 620 (Ed. Gruber)*, Studienpartitur, Kassel, Bärenreiter-Verlag.
- 29) カワイ音楽教育研究所編, *すぐに役立つ音楽用語ハンドブック*, カワイ出版刊.
- 30) A. ピーター・ブラウン著, 鳴海史生訳, 「指揮 John Eliot Gardiner・管弦楽 Englishc Baroque Sololists・合唱 the Monteverdi Chor」によるハイドン作曲「四季」演奏の CD (1990年1月ロンドンにて録音, POCA-2573/4) のライナーノートの曲目解説, Polydor K. K. (1992).
- 31) Gottfried Augst Bürger, *Spinnerlied (1789)*. この詩は次のサイトからダウンロードできます。 <https://www.projekt-gutenberg.org/buerger/gedichte/chap012.html>
- 32) Johhann Adam Hiller, *Die Liebeauf dem Lande (1768)*. この曲は次のサイトから楽譜がダウンロードできます。 [https://imslp.org/wiki/Die\\_Liebe\\_auf\\_dem\\_Lande\\_\(Hiller%2C\\_Johann\\_Adam\)](https://imslp.org/wiki/Die_Liebe_auf_dem_Lande_(Hiller%2C_Johann_Adam))
- 33) 例えば, 里中満智子, *マンガ名作オペラ6 フィガロの結婚/魔笛/ドン・ジョバンニ/セビリアの理髪師*, 中公文庫, 中央公論社 (2007).
- 34) モーツァルト交響曲第40番ト短調 KV 550, *Zen-on miniature score*, 全音楽譜出版社 (2020).
- 35) Mendelssohn, *Ein Sommernachtstraum, Konzert-Overtüre op. 21, Kleine Partitur*, 日本楽譜出版社.
- 36) 荒井秀直訳, *オペラ対訳ライブラリー モーツァルト 魔笛*, 音楽之友社 (2000).
- 37) 平岡一幸, *合唱音楽における音律の数理科学*, 東京工芸大学工学部紀要, Vol. 41 No. 1, 1-8 (2018).
- 38) 平岡一幸, 阿部はる奈, 田島滉太, *合唱のためのフーリエ音楽学: 母音を構成する倍音群の解析*, 東京工芸大学工学部紀要, Vol. 44 No. 1, 6-15 (2021).
- 39) 平岡一幸, *バッハのマタイ受難曲における楽曲分析と楽曲間相互関係の考察*, 東京工芸大学工学部紀要 (人文・社会編), Vol. 46 No. 2, 24-32 (2023).
- 40) 平岡一幸, *メンデルスゾーンのオラトリオ「聖パウロ」における楽曲分析と考察*, 東京工芸大学工学部紀要 (人文・社会編), Vol. 47 No. 2, 1-9 (2024).